九響 第418回 定期演奏会

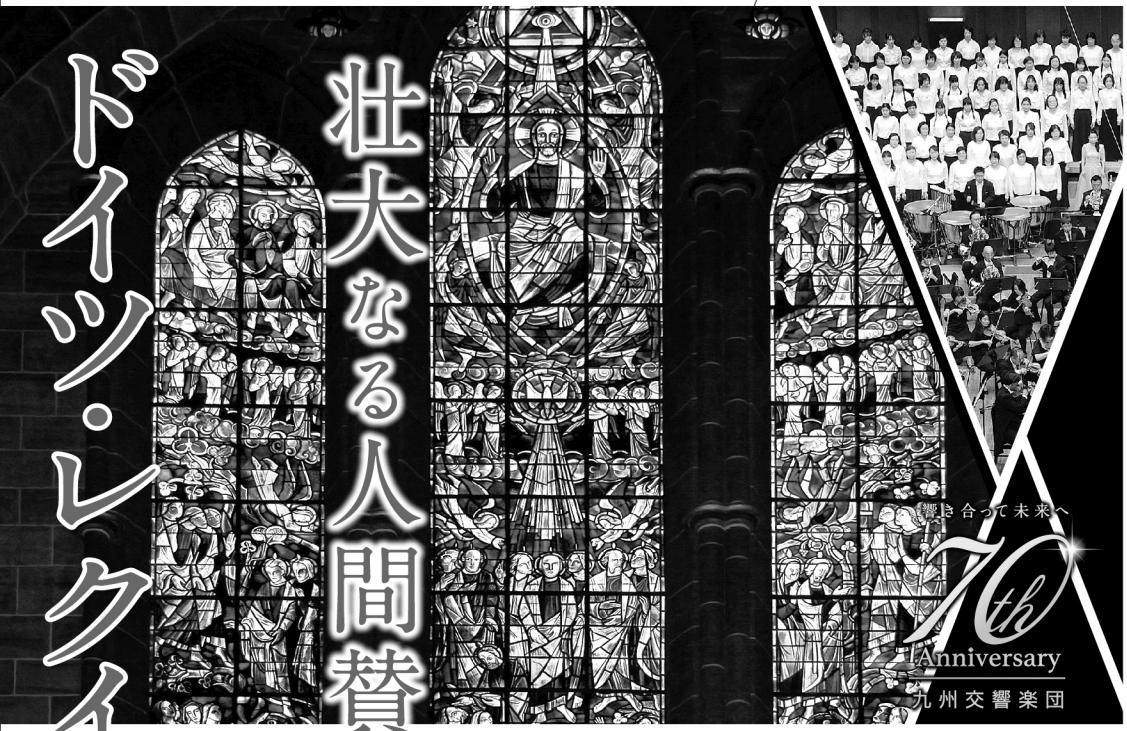
The Kyushu Symphony Orchestra

The418th Subscription Concert

2023 12.8(金)

［開演］午後7時　［開場］午後6時

アクロス福岡シンフォニーホール



指揮 小泉 和裕
Conductor : Kazuhiro Koizumi

©勝村祐紀

ソプラノ 並河 寿美
Soprano:Hisami Namikawa

バリトン 青山 貴
Baritone:Takashi Aoyama

［合唱］九響合唱団 ほか
Chorus:The Kyushu Symphony Choir etc.

［合唱指揮］横田 諭
Chorus Conductor:Satoshi Yokota

今回の演奏会のコンサートマスターは、扇谷泰朋の予定です。

ブラームス／ドイツ・レクイエム 作品45

Brahms ／ Ein deutsches Requiem Op.45

※本公演は1曲のみの演奏のため、開演後は原則ご入場いただけませんのでご了承ください。

九響オンラインチケット

九響　検索

※インターネットでご購入いただけます。

24時間受付　システム提供：イーティックスデータファーム

クレジットカード決済、セブン・イレブン発券、パソコン・スマートフォンでの座席指定など、便利なお申し込み方法で24時間受付しております。

九響チケットサービス　【受付】平日：午前9時30分～午後5時30分

Tel.092-823-0101　ご自宅まで送料無料でチケットを郵送致します。

アクロス福岡チケットセンター	Tel.092-725-9112
アクロス福岡WEBチケット	https://www.acrosticket.jp
チケットぴあ	［Pコード］231-898（取り扱いはWebのみ https://t.pia.jp）
ローソンチケット	［Lコード］88800（取り扱いはWebのみ https://l-tike.com）

チケット好評発売中

チケット料金（全席指定・税込）

［S　席］5,700円 ［A　席］4,700円
［B　席］3,600円 ［学　生］1,500円
［車椅子席］（限定4席）3,600円

※車椅子席をご希望の方は九響チケットサービスまたは九響ホームページ内［お問い合わせ］フォームよりお申し込みください。
※学生料金でのお求めは、B席のみ対象となります。

主催：公益財団法人 九州交響楽団
後援：福岡県・福岡市・（公財）福岡市文化芸術振興財団・NHK福岡放送局・（公財）九州文化協会・福岡文化連盟・九響後援会
協力：（公財）アクロス福岡
助成：福岡県・福岡市・文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援））| 独立行政法人日本芸術文化振興会
（公財）三菱UFJ信託芸術文化財団

文化庁

Program

11/9 第417回 定期演奏会

The 417th Subscription Concert

巨匠ポリャンスキー 至高のラフマニノフ

11月9日（木）開演：午後7時
9th Nov.(Thu.), 2023 19:00

アクロス福岡シンフォニーホール
ACROS Fukuoka Symphony Hall

指揮 ヴァレリー・ポリャンスキー
Conductor : Valery Polyansky

ピアノ 牛田智大
Piano : Tomoharu Ushida

コンサートマスター 扇谷泰朋
Concertmaster : Yasutomo Ogitani

セルゲイ・ラフマニノフ
Sergey Rachmaninov

パガニーニの主題による狂詩曲 作品43
Rhapsody on a Theme of Paganini Op.43

休憩 intermission

セルゲイ・ラフマニノフ
Sergey Rachmaninov

交響曲 第2番 ホ短調 作品27
Symphony No. 2 in E Minor Op.27

Ⅰ. Largo - Allegro moderato
Ⅱ. Allegro molto
Ⅲ. Adagio
Ⅳ. Allegro vivace

※本公演はライブ配信（有料）を行います。詳しくはP.38「事務局からのお知らせ」をご覧ください。

ご来場のお客様へ　本公演終了後に、ロビーにて楽団員有志が皆様をお見送り致します。わずかな時間ではございますが、お気軽にお声がけください。

※〈プログラムノート〉はP.18～P.21をご覧ください。

主催／（公財）九州交響楽団
協賛／椎木正和
協力／（公財）アクロス福岡
助成／文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援））| 独立行政法人日本芸術文化振興会
福岡県・福岡市
後援／福岡県・福岡市・（公財）福岡市文化芸術振興財団・NHK福岡放送局・
（公財）九州文化協会・福岡文化連盟・九響後援会

文化庁

指揮 ヴァレリー・ポリャンスキー

Conductor

Varely Polyansky

©堀衛

1949年モスクワ生まれ。モスクワ音楽院にて、合唱音楽の権威ボリス・クリコフに師事して在学中から指揮活動を開始した。1975年自ら結成したロシア国立室内合唱団を率い、グィド・ダレッツォ国際合唱コンクールでロシアの団体としては初の優勝を飾り、特別賞と最優秀指揮者賞も受賞。以来、「合唱のカラヤン」「赤いカラヤン」等の異名を拝す。

その後、モスクワ・オペレッタ劇場の指揮者を務めると同時に、ゲンナジー・ロジェストヴェンスキーに指揮法を学び、ボリショイ劇場等で多くのオペラ上演を手掛けた。1992年ロジェストヴェンスキーの要請で旧ソビエト国立文化省交響楽団を改称したロシア国立交響楽団の音楽監督に就任。幾重にも練りあげられたピアニッシモを駆使する独自の手法から、ロシアきっての鬼才指揮者と高い評価を得て、世界各国のツアーも大成功を収めた。合唱作品を含めラフマニノフ、グラズノフなど様々な作曲家の録音多数。

1996年ロシア人民芸術家叙位。モスクワ音楽院教授。2015年にロシア国立交響楽団と初来日を果たし、19年12月・22年2月九州交響楽団に客演、絶賛を博した。

Valery Polyansky is a Russian orchestral and choral conductor. He is a professor of the Moscow Conservatory, People's Artist of Russia, artistic director, chief conductor, and founder of the State Capella of Russia. Born in Moscow in 1949. He studied choral conducting at the Moscow Conservatory under Boris Kulikov, and started his career as a choir conductor while he was still a student. In 1975 he participated in the Guido d'Arezzo International Choir Competition with the State Capella of Russia founded by himself and won the first prize for the first time as a Russian chorus group. Besides working for the Moscow Operetta Theater, he studied the orchestral conducting under Gennady Rozhdestvensky and became to participate in a large number of opera productions at the Bolshoi Theater and others. In 1992 upon the request of Rozhdestvensky, Polyansky took the post of artistic director of State Symphony Capella of Russia. At the new post he has received a great success in the worldwide tours. He has conducted performances for a number of recordings on the Chandos recording label.

ピアノ 牛田智大（とも はる）

Piano

Tomoharu Ushida

©Ariga Terasawa

2018年第10回浜松国際ピアノコンクールにて第2位、併せてワルシャワ市長賞、聴衆賞を受賞。2019年第29回出光音楽賞受賞。1999年福島県いわき市生まれ。

2012年、クラシックの日本人ピアニストとして最年少12歳でユニバーサル ミュージックよりCDデビュー。2015年「愛の喜び」、2016年「展覧会の絵」、2019年「ショパン：バラード第1番、24の前奏曲」、2022年「ショパン・リサイタル2022」は続けてレコード芸術特選盤に選ばれている。

シュテファン・ヴラダー指揮ウィーン室内管（2014年）、ミハイル・プレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管（2015年／2018年）、小林研一郎指揮ハンガリー国立フィル（2016年）、ヤツェク・カスプシク指揮ワルシャワ国立フィル（2018年）各日本公演のソリストを務めたほか、全国各地の演奏会で活躍。その音楽性を高く評価され、2019年5月にはプレトニョフ指揮ロシア・ナショナル管モスクワ公演、8月にワルシャワ、10月にはブリュッセルでのリサイタルに招かれた。2024年1月には、トマーシュ・ブラウネル指揮プラハ交響楽団日本公演のソリストとして4公演に出演予定。

Tomoharu Ushida won the 2nd Prize, the Mayer of Warsaw Prize and the Audience Prize in the 10th Hamamatsu International Piano Competition, held in 2018. In 2012, Tomoharu won 1st Prize in the 16th Hamamatsu International Piano Academy Competition(becoming the youngest winner in its history). In the same year, he was the youngest-ever Japanese classical pianist to release a debut CD on the Universal Music label. Since then he has released numerous CDs including Tomoharu Ushida Debut (2012), Memories(2012), Liszt & Chopin(2013), Traumerei(2014), Liebesfreud (2015), Pictures at an Exhibition(2016), Chopin 24 Preludes and Ballad No.1(2019), and in August 2022, he is set to release a new CD CHOPIN RECITAL 2022 as his first live recording. In addition to performing recitals in many locations of Japan, Tomoharu Ushida has performed as a soloist on the Japan tours of Wiener Kammer Orchester conducted by Stefan Vladar (2014), Russian National Orchestra led by Mikhail Pletnev(2015 and 2018), Hungarian National Philharmonic Orchestra conducted by Ken-ichiro Kobayashi(2016), and The Warsaw Philharmonic led by Jacek Kaspszyk (2018).

11.9 木 第417回 定期演奏会

高坂葉月(音楽学者)

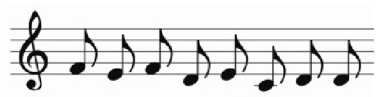
セルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)
《パガニーニの主題による狂詩曲》作品43

1917年のロシア革命を期に亡命したラフマニノフは、混乱の中、スウェーデン、デンマークを経てアメリカに渡り、主にピアニストとして精力的に活動する。しかし、演奏活動の多忙さに加えて、アメリカの環境は彼の創作意欲を掻き立てるものではなかったようだ。渡米後の創作数はロシア時代に比べて極端に少ない。作曲から遠ざかっている理由として、ある時ラフマニノフは友人メトネルに「もう何年もライ麦のささやきや白樺のざわめきを聞いていない」と答えたという。ラフマニノフの故郷への思いは強く、ロシアに帰れる日を待ちわびていた(その思いは叶わず、アメリカで69歳の生涯を閉じる)。

そんなアメリカ時代にも、森に囲まれた別荘をスイスにみつけてからは作曲意欲も出てきて、60歳前後にピアノの変奏曲を2つ作曲している。一つは《コレッリの主題による変奏曲》で独奏曲。そして3年後、61歳の時に書いたのがこの《狂詩曲》だった。これは実質的にはピアノ協奏曲で、伝説のヴィルトゥオーソ、ニコロ・パガニーニの《ヴァイオリンのための24のカプリス》の第24曲を主題とする壮大な変奏曲として構成されている。《カプリス》といえば、リストやブラームスらの創作意欲を掻き立てた、音楽史上の重要な参照点でもある。

譜例1:パガニーニ《カプリス》第24曲の主題より

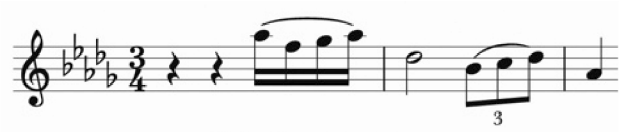
長年の友人で、バレエ・リュスの振付師として知られるフォーキンがこの曲に基づくバレエを構想したときに、ラフマニノフはこの作品について、パガニーニと悪魔との取引をイメージしたと話したという。作曲時からこのイメージが彼の頭の中を支配していたかはわからない。しかし実際、悪魔や死との結びつきが強い西洋の伝統的な旋律を、ラフマニノフはこの曲のもう一つの要としている。



譜例2:《怒りの日》より

《怒りの日》は中世のグレゴリオ聖歌であるが、ベルリオーズやサン=サーンスら19世紀の作曲家たちは、この旋律を使ってロマン主義のおどろおどろしい世界観を描き出した。ラフマニノフの場合、おそらくは自らのピアニスト・指揮者としての経験の中でこの旋律を知ったのであろう。この旋律を想起させる音楽的な断片は、彼の作品から頻繁に聞こえてくる。ただ、意識して使ったのはこの《狂詩曲》が最初だったといわれている。

ラフマニノフは24の変奏の中で、拍子、テンポ、主題の打ち出し方を工夫し、急―緩―急のダイナミックな音の物語を構成した。まず《カプリス》の16分音符をいかした劇的な序奏に始まるが、主題はすぐに現れず、第1変奏では《カプリス》の輪郭が断片的に描かれる。聴衆の期待を高めた上で奏される主題は次々と豊かに変奏され、第7変奏で初めて《怒りの日》が厳かに響く。第12変奏から第18変奏までが「緩」に当たる中間セクションで、その締めくくりとなる第18変奏は《カプリス》の16分音符の「反行」に基づく旋律で、雄大なパースペクティブと安らぎを与えるようなロマンティシズムの極み。



譜例3:第18変奏の旋律。
《カプリス》の16分音符を上下逆さまにした反行モチーフから構成される。

第19変奏は軽快に駆け出すが、そこから第24変奏まで曲想の変化は目まぐるしく、2つの主題が複雑に絡み、ピアノもヴィルトゥオーソ的な表現を重ねてゆく。この曲からは、ヴィルトゥオーソの系譜を意識的に継いで、伝統ある主題を独創的に掛け合わせることで、新たな表現を切り開いたラフマニノフの晩年の充実ぶりがうかがえる。

作曲／1934年6月-8月　**初演**／1934年11月7日、ボルチモアにて作曲者自身のピアノ独奏で初演　**編成**／ピッコロ、フルート2、オーボエ2、コーラングレ、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、合わせシンバル、吊るしシンバル、小太鼓、トライアングル、グロッケンシュピール、ハープ、弦5部
使用楽譜／カルマス

セルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)
交響曲 第2番 ホ短調 作品27

22歳の時に作曲した交響曲第1番は、1895年にペテルブルクで初演されたが、オーケストラの練習時間不足をはじめとする不幸がいくつか重なり大失敗となってしまった。ラフマニノフはショックを受けて鬱状態に陥るが、《ピアノ協奏曲第2番》の成功や指揮者としての活動の充実などを経験して少しずつ自信を取り戻し、第1番から10年あまりの時を経てようやく交響曲第2番を完成させた。この頃のラフマニノフは帝政ロシア末期の混乱を避けてドレスデンに滞在。休暇の時期だけ妻の実家のイワノーフカに戻る生活を3年あまり続けており、以前よりも集中して作曲できる環境にあった。ペテルブルクで行われた初演は大成功を収め、交響曲第1番失敗の地でのリベンジを果たすことができたのである。その後、モスクワで行われた演奏も好評で、ラフマニノフは尊敬する「チャイコフスキーの後継者」ともてはやされたという。そして、優秀なロシアの若手作曲家に贈られるグリンカ賞を、《ピアノ協奏曲第2番》に続いてこの交響曲でも受賞している。

望郷の思いを抱えて書いたとされる交響曲第2番には、ラフマニノフならではの息の長い美しい旋律、徐々に力強くクライマックスを築き上げていく豊かなテクスチュアと繊細な音色の変化が見られるだけでなく、雄大なロシアの大地とそこに息づく豊かな自然を思わせる、凛としたエネルギーが感じられる。

第1楽章　ラルゴ、4/4拍子―アレグロ・モデラート、2/2拍子、ホ短調、ソナタ形式

序奏つきのソナタ形式。刻々と変化する和声の流れの中で、緊張感ある音楽の語りが重層的に紡がれる。とてもドラマティックな楽章である。

第2楽章　アレグロ・モルト、イ短調、2/2拍子、複合三部形式

歯切れ良い弦楽器とホルンの躍動的な絡み合いで始まるスケルツォ。そこに流麗な旋律や厳かな旋律など表情の異なる断章が挿入され、コントラストを引き立て合いながら前進する。

第3楽章　アダージョ、イ長調、4/4拍子、三部形式

ヴァイオリンの美しく感傷的なゼクエンツに、独奏クラリネットによる甘美な旋律が続く。繊細に変化する和声を背景に、複数の旋律が静かに織り合わされてゆく。

第4楽章　アレグロ・ヴィヴァーチェ、ホ長調、2/2拍子、ソナタ形式

第2楽章の主題と関連する3連符を基調としたリズムカルな主題で幕を開ける。出だしから祝祭的なムードに包まれており、優雅さもある。前楽章を回想しながらクライマックスに向かう。

作曲／1906-1907年　**初演**／1908年1月26日、ペテルブルクのマリンスキー劇場　**編成**／ピッコロ、フルート3、オーボエ3、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、グロッケンシュピール、弦5部
使用楽譜／カルマス

※編成は演奏の都合上、異なる場合がございます。ご了承ください。